

びわ湖大津歴史百科 フォーラム

「百人一首からみた近江」

講師：冷泉 為人（冷泉家第25代当主）

吉海 直人（同志社女子大学教授、小倉百人一首殿堂 時雨殿 館長）

佐藤 久忠（近江神宮宮司）

狩野 博幸（日本近世美術史家）

渡辺 麻里子（弘前大学教授）

内容：講演／パネルディスカッション

日時：2017年2月18日（土） 13:00～16:30

場所：三井寺事務所（〒520-0036 大津市園城寺町246）

【フォーラムテーマ】

豊かな自然を育んできた琵琶湖を有する滋賀県には、百人一首ゆかりの人物や名所旧跡が数多く存在しています。とくに大津市浜大津・石山地区に限っても、百人一首の巻頭を飾る天智天皇、石山寺ゆかりの紫式部、三井寺の行尊大僧正などの歌人たち、能や謡曲で有名な逢坂の関、競技かるたの名人戦・クイーン戦が開催される近江神宮などがあります。

このフォーラムでは、「百人一首からみた近江」をテーマに歴史と文化の宝庫・大津にちなんだ和歌を通して、近江の歴史と文化、そして誰もが知っているようで知らない百人一首のほんとうの姿に迫ります。

【講師プロフィール】

冷泉為人（れいぜい ためひと）

冷泉家第25代当主。冷泉家時雨亭文庫理事長。日本美術史家。専攻は近世絵画史。2007年京都府文化賞功労賞受賞。

吉海直人（よしかい なおと）

同志社女子大学教授。小倉百人一首殿堂 時雨殿 館長。國學院大學博士（文学）。百人一首研究の第一人者。

佐藤久忠（さとう ひさただ）

近江神宮宮司。國學院大學神道専攻科卒業。明治神宮祓宜・明治神宮教学部長を経て、1988年より現職。

狩野博幸（かの ひろゆき）

日本近世美術史家。九州大学大学院博士課程中退。京都国立博物館学芸員、同志社大学文化情報学部教授を歴任。

渡辺麻里子（わたなべ まりこ）

弘前大学人文社会科学部教授。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。専門は中世説話文学、仏教文学。

■挨拶（総本山園城寺執事長：福家俊彦）

この事業は文化庁さんの補助事業ということで、補助金を頂いて遂行しているものでございます。大津市教育委員会をはじめ、社寺としましては石山寺さん、それと私共三井寺が主となって、地元大津の文化遺産を用いて地域を活性化し、ほかの地域の方々にも来て頂こう、そういう目的で開催させて頂いております。

本日のフォーラムにつきましては一つ「百人一首」を取り上げてみようということで、色々な先生方をお願いをしたわけでございますが、これには2つほど簡単な理由がございます。百人一首は皆さんもよくご存知だと思いますが、中を見てみますと、やはり大津・近江に縁のある場所が詠われていたり、また人物も大津・近江に関連のある方が沢山含まれている。よく考えると「これは他の都市にはない事じゃないか」と——京都はとりわけ格別でございますが——滋賀県もそういう位置にあるんじゃないだろうか、というのが1つ。そしてもう1つは、今年は丁度「大津宮」が天智天皇さんによってご遷都されて1350年という記念の年を迎えておるといこと。今日お運び頂いている近江神宮さんも御祭神は天智天皇さんでございまして、今年1350年のお祭りもされるというふう聞いておりますが、百人一首についても勿論、冒頭は天智天皇さんの「秋の田の～」の歌から始まっております。そういう意味でも、大津・近江は非常にご縁のある土地ということで、本フォーラムでは「百人一首」を取り上げさせて頂いた次第です。

私はこの百人一首につきまして何も知識が無いもので、今日お越し頂いております吉海先生のほうにお願いに行きました折、先生から御自冊を頂きニワカ勉強をさせて頂きましたところ、なかなか今まで知らなかったことが沢山ありました。百人一首は子供の頃にそれなりに遊んできたので知っているようなつもりでしたが、いざ色々なことをお聞かせ頂くと、知らないことが沢山あってちょっと吃驚したというところがあります。特に、この百人一首は「百人の人たちからそれぞれ一首を撰ぶ」ということですが、「何故この一首が撰ばれたのか。この歌は本当にこの人の一番いい歌ですか、他にもないんですか」と、やはりこういう議論は昔からも随分あるのだと思うのですが、それだけ百人一首を撰ぶということは非常に難しいことなんだと思います。丁度、滋賀県五箇荘のご出身で塚本邦雄さんという前衛歌人——寺山修司さんとか岡井隆さんなんかと同時期に、非常に華々しい活躍をされた方——、この方がですね、もう随分前ですけれども『新撰 小倉百人一首』という本を上梓されたことがあります。丁度60歳の誕生日の日に百首を撰ばれたというふう聞いております。塚本さんは、百人一首の一人一首の撰び方をご自分で10個定めて——ある意味、定家卿に挑戦するような形で——新たな百首を撰ばれてこの本を上梓されました。冒頭にはご自身の序歌が載っております「きらめくは華の玉箱眠る夜に海の千尋の～」という歌がありまして、まさに近江の歌の文化も「華の玉箱」であるというように私には受け取れる歌でありました。

今日は、百人一首の色々な謎も含めてですね、そこを通じて近江の歴史・文化を知り、そこからもう一度我々が地域を見直すことに繋がれば良いなということで、各界のご専門分野において第一線でご活躍されておられる先生方をお呼びしております。私も皆さんと一緒に勉強させて頂いて、地域のために何か出来ることを考えられればと、そういうふうに思っておるところでございます。今日は本当にお忙しい中、皆さん御参集頂きましてありがとうございます。それではこれから、どうぞ宜しくお願いを致します。

■特別講演（講師：冷泉為人）

只今ご紹介頂きました、冷泉でございます。

このフォーラム「百人一首からみた近江」ということで、キーワードはやはり「百人一首」と「近江」になろうかと思っております。——そこで、私に与えられた役目といいますのは——百人一首を編んだ人物は「藤原定家」と言われている

わけですが、この定家さんは、私共（冷泉家）の遠いところのご先祖様でございます。そこから考えますと冷泉の家というのは800年続いている歌詠みの家で、ずっと伝統的な、まさに百人一首のような歌を詠み続けている家だと言っていいのではないかと思います。

はじめに

私自身の「近江」に対するイメージを、前置きに使いたいと思います。私が「近江」というものに興味を持ちましたのは学生時代でありまして、「奈良とも違う、京都とも違う、近江というところは面白いところであるな」と思ったわけでありまして。私は、兵庫・加古川のほうの田舎からやっとの思いで関西学院大学・文学部・美術科に入ったわけでありまして、そのときは美術のことなどほとんど分からなかった。そこでまず、「仏像・仏さん」ということで和辻哲郎さんの『古寺巡礼』を読んで奈良の仏さんを見て廻りました。それからこちら近江では、川勝先生の『近江：歴史と文化』を読んで色々見て廻り、そのときに、奈良の東大寺の「お水取り」の水が若狭の神宮寺から送られているということ、さらに近江・湖東のところには良いお寺の仏像さんがずらっと並んでいるのを知ったわけでありまして。そうしたことで、「奈良時代からは大陸の文明・最先端の考え方が日本にもたらされた。その道筋に、近江の国がある」、こういうことを考えるようになりました。また、今回この講演のお話を頂きましたときも、「そもそも近江というのはどういう地形をしているのか」ということを考えたわけですね。そうしましたら、近江には真ん中に大きな湖があります。その周りには、北から賤ヶ岳・伊吹・鈴鹿・信楽というように山がずっと続いているわけでありまして。西のほうには比良・比叡山がある。四方が山に囲まれて、湖が真ん中にある、丁度「すり鉢」のような形ですね。そして、いま話したように、近江は奈良時代、大陸の文明が（日本海から奈良へ）伝えられる道筋にあたるということが考えられるのではないかと、ということでありまして。

子供のとき、私は田舎育ちなんですけれども、8月20日頃の地蔵盆には、地域の年寄りが地蔵様のところに集まって念仏を唱えるわけです。あの、声明というような高等なものではありませんけれども、リズムと言うんでしょうか、それが子供心に今でも耳に残っております。また、西国観音霊場の御詠歌でいいますと、石山寺さんは「後の世を願ふ心はかろくとも仏の誓ひおもき石山」というふうに、これは「五七五七七」になっています。三井寺さんも「いで入るや波間の月を三井寺の鐘のひびきにあくる湖」となっており、五七五七七で歌になっているということです。こういうことが私わかりまして、そしていま一つ類例を申し上げますと、「琵琶湖周航の歌」というのがございます。私の恩師で四校を出て京大の美学を出られた先生が、仲間と一緒にお酒を飲んだときにはヤクザっぽく唄っておられた歌なわけですが、こここのところにも一番に「昇る狭霧やさざなみの志賀の都よいざさらば」と、まさに七五七五になっておるわけですね。ということは、「歌」ということで言いますと「七五調」というのが基本になっているのではないかと。皆様方、思い出して頂きたいのですが、小学校唱歌もそのほとんどが七五調になっていると思います。それから卑近なところでは演歌が、ほとんど七五調になっています。皆さん得意の演歌の歌詞を指で折って頂いたら七五調になっているはずですね。それは結局、「日本人の息継ぎ・リズムが五七五七七になっている」と言ってもいいのではないかと、私は考えているわけでありまして。

先ほど、湖東の仏像の話ですこし致しましたが、「湖東三山」の四季折々に景色が全然違うということ、これはやっぱり今でも鮮明に覚えております。そしてですね、蒲生町の石塔寺というところの三重塔を見たとき「あ、コレ日本のものでは無いな」と、まさに朝鮮の文化というものが石塔寺の三重塔には認められるわけですね。それから渡岸寺の十一面観音の、後ろの笑ってはる観音さん、あれを見たときには吃驚してしまいました。つまり、そういう非常に色々な文

化をここ近江は伝えている・育んでいると言えるのではなからうか、と思っております。

百人一首と近江の和歌

百人一首と定家さんの話ですけれども、配布資料にあります定家さんの家系図（道長～為相）で言いますと、道長さんから長家さん——この長家さんから始まる家を御子左家といいます——それから忠家さん、俊忠さん、俊成さん、「定家」さん、為家さんと続くわけであります。この定家さんが百人一首を編まれたということですね。で、そここのところで実は、定家さんと為家さんの別荘が「嵯峨中院町」というところにあったわけです。為家さんの初めの奥様は宇都宮頼綱の娘さんですが、この宇都宮頼綱の別荘も、嵯峨中院町にあったわけです。そこでですね、宇都宮頼綱が自分の娘の嫁いでいる冷泉の家（為家さん）の父親である定家さんに、「別荘の襖に貼る歌を書いてくれ」と頼んだようであります。そこで百首を撰んだものが、「百人一首」ということです。そういうことで、一応いまのところ「百人一首といえば藤原定家が撰じたものだ」ということになっているわけであります。おそらく、私の講演の後、専門的なことでは吉海先生が話をなさるかと思いますが、私も「百人一首」というのがあるわけですし、ここではちょっと専門的になりすぎるかなと思っていて、先ほど吉海先生も「どうしようかな」と悩んでおられましたですけれども……。まあ、そういう関係で「百人一首」というものが編まれたということになるわけです。

そこで皆様方、百人一首とはどのようなものだと考えていらっしゃるでしょう。いわば「ワケの解らん百人一首だ」と言ってしまうことも出来るかと思えます。これはですね、奈良時代から鎌倉の始め頃、600年過ぎ頃～1200年頃にかけての歌を百人の歌で著しているということです。で、そここのところには、非常に抽象的な言い方をしますけれども「歴史と文学（文化）」ということが百人の和歌でもって表されているということです。こんな性質をもった「集」は他に無からうかと思えます。

この中で、短歌をお詠みの方いらっしゃいますか。いらっしゃったら手を上げて下さい。いらっしゃいませんか。あれ、私の前やから遠慮してはるんかな。こここのところで、「和歌」というのは「やまとうた」と読んで頂ければ非常にありがたい。和歌（やまとうた）と短歌とは違うということです。近江神宮の佐藤様、そして吉海先生がその後輩にあられるわけですけれども、國學院大學は、まさに「短歌の居城」と言ってもいいかと思えます。

そこで皆さん方、和歌ということと言いますと、正月には「梅に鶯」というふう知っていらっしゃるかと思えます。秋はいわゆる「紅葉に鹿」。でも皆さん方、そういうことはご存知だろうと思えますけれども、実際に梅に鶯が留まっているのをご覧になられたことはありますか。あるいは「紅葉に鹿」なんか……。これは若いときによく遊ばれた方、「こいこい」をした人はよくご存知だろうと思えますけれども、あれも何故そういうふう到我々は知っているのかということ。それがまさに先ほどホワイトボードに「歴史と文学（文化）」と書きましたけれども、文化というものはそういう形で繋がって来ているということです。

そこでですね、「百人一首」ということと言いますと私は「非常にワケの解らん百人一首だ」と思っております。それは、十人おれば十人が好きなように解釈できるというところがあるのではないか、ということです。そしていま一つ、「歴史と文化」というところで言いますと、配布資料に書きました通り「百人一首は文字通り、百人の和歌を編集したもので、百首、つまり奈良時代、平安時代、鎌倉時代を代表する歌人たちがそれぞれに百の時間と、百の空間の【もの】【事】【ことがら】を表現している。」ということであります。ここは一様に理屈っぽく、私なりに考えたわけであります。「もの」と「事」と「ことがら」これはですね、本居宣長が「言葉というのは大事だ」ということを言っております。で、そここのところでですね、「もの」と「事」と「ことがら」というのが大事なんだと、それがまさに「歴史と文化」と

ということだろうと思います。ですから先ほど「歴史と文学（文化）」ということを行いましたけれども、百人であるわけですから、それだけの、百通りの歴史と文学（文化）があるといっても良いのではないかと思います。こういうものは、勅撰集にも無いわけで——勅撰集というのはある限られた時代のものですね——、但しだんだん後になればそういう時間の広さは持ってくるわけですが、そういう意味です、ですから、「同時に勅撰集の形態をとりながらも、百首に限定・集約されたもので、我々日本人のこころを象徴的に表現しているのではないだろうか。またここにまさに定家の思いが盛り込まれている。平安時代の王朝人の美意識である【優美】【雅び】【繊細さ】などを元にして、鎌倉時代の【武家】に対して和歌において象徴させたものではなかろうか」と思っているわけでありまして、で、これはまさに皆さん方もご承知のとおり、鎌倉時代は武家の時代になります、ですからその武家に対して「公家」というところの意識が絶対あったのではなかろうかと思うんです。定家さんというのは負けず嫌いで、喧嘩っ早くて、自分は出世をしたいとずっと願っていたわけですが、残念ながら冷泉の家はそれだけの出世する家柄ではなかったわけ。公家の階級で言うと、丁度中ほどの格の家であったということです。大納言までしか上れなかったということになるわけ。ですから、その口惜しさというんでしょうか、そういうものをバネにして、自分の社会を表現する一つの手立てにしたのではないかと考えています。そういうこと言いますと、百人一首というのは、まさに我々日本人に古典ということを教えた、大変大事なことでなかったか」と私は思うのです。

そうしたことで言いますと、それを「カルタ」にしたということ。カルタというのは皆さん方も既にご承知かと思えますけれども、これはポルトガルからカルタが入って来て、そして札になったということです。札になって、遊戯になった、ということです。「古典を遊びでもって理解していく」ということがですね、行われたということで、我々のようなそういう民族が世界でどこにあるか、ということをお考え頂けたらと思うわけでありまして。私自身も子供のときに——ここ（三井寺）で言えば憚る言葉なんですけれども、お許し頂きたいんですけれども——、正月には「坊主めぐり」をしていました。で、私が母親に「お母ちゃん、何故ここに坊さんが沢山居はんねん？」とこう聞いたわけ。で、「あんたアホやな。昔から坊さんというのは賢いに決まってるねん。歌も上手やったんや」と言うて、そのときは私も「ふーん、そうか」ということで何の疑問も無く母親の言うことを信じていたわけですが、でも、子供心にそういうことを知って歌もちゃんと覚えておけば、もうちょっとマシな人間に成ったんやろうと思うわけですね。私、子供のときは坊主めぐりばかりで歌は全然覚えてなかったんですね。で、後年、この百人一首などを讀んだり色々しているわけですが、まして冷泉の家に入ったからにはそれを知らんというわけには参りませんので。

ご先祖様が撰びはったわけですから、そのことをやっぱり勉強せなイカンということで、色々讀んだりしているわけですが、その中で、誰かが言っておられたと思うんですけれども、百人一首には「恋の歌」が多いということです。これも特色であろうと思います。百首のうち、四十数首は恋の歌だろうと思います。子供に恋なんか分かって堪るかと思うわけですが、でもそうしたことが言えるのではないかと思います。

百人一首というものがどういうものであるかということは、いわゆる「奈良時代から鎌倉時代の歴史と文学（文化）」を百人の歌で表しているものだ」と、それは「日本の古典だ」ということだけ、今日のご理解頂ければありがたいと思います。

これで私の話を終えさせて頂きたいと思います。どうもありがとうございます。

■基調講演（講師：吉海直人）

どうもこんにちは。今回のフォーラムは「百人一首からみた近江」ということで、たぶんこういうテーマで行われるのは初めてかも知れません。先ほど伺ったんですけど、三井寺で百人一首の催しが行われるというのも多分初めてということ。普通でしたら近江神宮で行われますもんね。でも「近江神宮ばかりが百人一首じゃないぞ」というのが今日はお出してくるのかも知れません。そういう形で、今日はお話をさせて頂こうと思います。

はじめに

実は、こういう雑誌がございまして『湖国と文化』、湖国というのは琵琶湖の国ですね、つまり滋賀県。数年前、これに丁度、今日と同じようなテーマで書かせて頂いたんです。百人一首というのは、京都が中心です。歌枕の数を調べてみると、当然京都に隣接している奈良というのも結構出てきます。で、たぶんその次くらいに、この滋賀県が出てくる。それは、滋賀県が詠まれた歌が沢山あるということではなくてですね、京都の貴族・天皇が滋賀県に遊びに来るとか、そういう形で滋賀県を訪れている、あるいはそこで歌を詠んでいる、住んでいるわけではないかも知れないけども、意外にその足跡があるし、あるいはその百人一首の歌人に関わりのあるお寺とか神社とかが多い、ということなんです。近江神宮の天智天皇、それから石山寺の紫式部、ここ三井寺ですと大僧正・行尊。あるいは比叡山もあるし、逢坂の関もある。いたる所に百人一首にまつわる様々なものが在るので、出来れば滋賀県、大津市もですね、「近江と百人一首」みたいなもので例えば散歩コースを作るとか、検証するとかして頂けると、益々百人一首との関わりが深くなっていくかと思っています。

で、実は、もう一つ紹介させて頂きますけれども、これはすぐお隣の津市歴史博物館のイベントチラシ。これも4～5年前に「百人一首かるたの世界」という展示会をやったときのもの。多分、これまで百人一首関係のもので、これ以上大きな展示会は無いくらいに沢山展示したものですけれども、どうも、見ていると、お客さんは少なかったようです。その頃はまだ、機運が高まってなかったのかも知れませんが、まあ、そういう形で私自身も、大津、百人一首ということに関わらせて頂きまして、今日ここに来ているわけです。

で、もう一つだけ紹介してみたいんですけど、こういう本がございまして『近江百人一首』、これも大分前に編纂されたものです。「近江を詠んだ歌」というのは何千首もある。その中で一人一首、百首撰ぼうと思ったら、やっぱり撰ぶのに苦労するくらい取捨選択をしなければいけない。つまりですね、近江というところは、先ほどから出てましたけれども、歴史と文化、和歌に富んでいる。でもそういう場所じゃないと、こういうものも出来ないというわけです。自分のとこでやろうと思っても、詠まれている歌が少なければ、どうにもならない。何処でも出来るわけじゃない。例えば東京でやろうと思ったら、まず古典はありませんから無理ですね。もう近代短歌しかないと思います。あるいは新たに作らないと無いかも知れません。だけれども、近江はこれが出るということです、そういう土壌を持っているということをお認識して頂ければと思います。

百人一首と天智天皇

今日、資料を作ってきました。裏側にですね、私、キャッチフレーズを作るのが大好きなんです、そこで余計なお世話で「大津観光のキャッチフレーズ」を作ってきました。例えば「【ちはやふる】を【近江】にかかると枕詞にしよう！」、なんか出来そうに思いませんか。「ちはやふる 近江～」ってねえ、出来そうに思いませんか。それから、ご存じ無い方も多いかも知れませんが、「急がばまわれ」ということわざありますね、これ、近江で作られた言葉なんです。そういうものもあんまり知られて無いような気がします。せっかく宝物が埋もれているのに、掘り起こされてない、もし原石が

あれば磨けばいい、そういうことを考えましてここに色々書いております。で、僕が一番言いたいのは真ん中に書いてます「近江は百人一首のふるさと！」。この「ふるさと」の意味は今の故郷と違います、実は「ふるさと」というのは「旧都」という意味でかつて都の在った場所。ですから平安京・京都にとっては、平城京・奈良がふるさと。「ふるさととなりにし奈良の都にも～」と詠っておりますね。で、近江に何があるかと言うと、天智天皇の「近江京（大津京）」が在るわけですね。まさに「ふるさと」なわけです。

その近江京、それから天智天皇、それが今日いらっしゃっている近江神宮さんに関わっている。佐藤宮司からもお話があるかと思えますけれども、百人一首の一番に天智天皇が置かれている、しかし何故置かれているのかをちゃんと語ってくれる人は居ないと思います。例えば、百人一首を「秀歌撰」——良い歌が集められている歌撰——というふうに考えると、絶対に答えが出ません。つまり天智天皇は歌人としては有名じゃないからです。「それをじゃあどうするの？百人一首って一体何だろう？」というわけで、先ほど冷泉先生からもありましたけれども、どうも我々は百人一首を簡単に考え過ぎている、そういうきらいがある。「百人一首は単なる秀歌撰」そういう捉え方をすると、「この歌（が撰ばれるのは）おかしい」とか「この人（が撰ばれるのは）おかしい」とかいつぱい出てくる。紫式部が百人一首に入るかどうかすらも、危ういことになる。源氏物語の作者ですけど、歌人としては大して有名じゃないですから。ではそういう人たちが何故百人一首に撰ばれなきゃいけないのか、そうなりますと、頭を切り替えなければいけない。「百人一首は単なる秀歌撰じゃないかも知れない」そういう目で見たときに、じゃあ天智天皇という方はどういう意味があるのか、紫式部はどういう意味があるのか、みたいなことが、改めて問題になるような気が致します。今日は時間がありませんし、夢中になるとすぐ時間を超過してしまいそうなので、時間を気にしながらやろうと思って、話を絞りました。佐藤宮司様も多分「天智天皇」をやられるかと思えますので、私は和歌のほうから切り込んでいきたいと思えます。

先ほどの話で、「600年～1200年」というのがありましたよね、天智天皇から後鳥羽順徳。どういう意味があるのか。で、私が思うにですね、これは「平安朝がすっぽり入っている」ということなんです。「天智から後鳥羽順徳の間には平安朝がすっぽり入っている」ということが私にとっては一番大事だと、そういうことです。となると、後鳥羽順徳はよく分かりますよね、ある意味で、平安朝の終焉、鎌倉幕府に天皇が負けて、武士の時代になる、そういう時代の人物。「じゃあ天智天皇は何なんだ、平安時代の人じゃないじゃないか」そういう意見があると思うんです。実は、天皇の系譜を見ていきますと、天智天皇のあとには天武天皇、と「天武系」が続きますね。天武、持統、文武、元明、元正、聖武、孝謙、淳仁、称徳、・・・続きますよね。その天武系が途絶えたとまた、天智天皇の孫・曾孫が即位する。つまり、「平安朝は天智系」なんです。ですから、平安朝の人々からは天智系が非常に尊ばれた。で、幸か不幸か、御陵が山科にある、京都の中にある。こういう天皇って珍しいわけです。平安朝の天皇の何人かの人たちも、やっぱり近くにありますしね。天智天皇をお祀りする、天智天皇のお墓参りをする、そういうことをやっております、平安朝の時代の人々にとっては天智天皇はどうやら特別な天皇だったらしい。そういうふうを考えれば、百人一首の一番に天智天皇が入っていることも何となく解る。つまり天智から始めて順徳で終わるということが、一つの歴史、一つの物語みたいな形を持っている。私自身は、「百人一首には平安朝が封じ込められている。平安朝の歴史も文化も封じ込められている」あるいは「平安朝の憧憬みたいなものが封じ込められている」そう考えるのです。百人一首というのは、武士には真似の出来ない、そういう文化がそこに盛り込まれていて、まあ、半分悔し紛れかも知れませんが、定家にとっては百人一首を突きつけることが、貴族社会のプライドみたいな側面もきっとあるんじゃないかなと思っております。

で、肝心の定家が、何を思って何を考えて百人一首を作ったか分かりませんが、半分は、アタったんですね。つまり、百人一首は埋もれなかった。むしろ、定家が何を考えたかを、後世の人たちが様々に考え、それに則って百人一首を活

用した。一つには、勅撰集の入門書という形で——室町の宗祇以降ですね——百人一首はてっとり早く貴族社会・勅撰集の和歌を勉強するテキストになる。600年間の和歌の流れが百首に収められている、こんな便利な本は無いですから。百人一首を学ぶことが、600年の和歌の歴史を学ぶことに繋がっていく、多分そういう利用の仕方がされてきたんだろうと思います。そしてそれは今日まで続いている。例えば、『源氏物語』と比較して——源氏物語ってこんなに大きい。百人一首ってこんなに小さい——大きい小さいか、プラスかマイナスか、っていうのはあるんですけど、私が最近ずっと言っているのは「小さいものに、逆に大きな力がある。小さいからこそ、出来るものがある。大きなものには出来ないものがある」ということ。つまり、『源氏物語』を読みなさい、と言われて読めますか？何日掛かって読めますか？私が最初に原文で読んだときは1ヶ月以上掛かりましたよ、毎日5時間以上読んで。途中で寝てますけど。百人一首はね、何十分、たった何十分です。全然違う。つまり、『源氏物語』を原文で最後まで読んだ人ここに何人いますか？って聞いてもほとんど手が上がらないけど、百人一首を読んだことがある人ってのはいっぱい手が上がる。つまり、短いこと、小さいこと、コンパクトなことがプラスに働くこともある。百人一首はそれをおそらく最大限に活かしている、そういうふうを考えれば分かり易いと思います。で、私が願っているのは、百人一首を日本の古典・文化の一つの発信装置みたいにして、それはもう日本人だけじゃなくて、世界中に、百人一首を通して日本の文化を紹介したい。で、話を戻しますが、多分ね、百人一首だけだったら駄目だったんです。ところが——先ほどのお話にもありましたけど——百人一首、つまり教科書がですね「遊び」と結びついたんです。これ、普通だったら考えられませんよ。つまりカルタと、遊戯具と結びついたために、遊びながら学べるんです。しかも、百人一首のカルタってね、実はコワイんです。「歴史仮名使い」で書いてあるんです、このご時世にですよ、現代仮名使いじゃなくて。で、歴史仮名使いのまま詠み上げられています。勿論、詠み上げたら「恋すてふ～」と書いてあっても「恋す蝶～」と詠むから、耳には全然関係ない。表記と読みが変わっている。それを外国人も、歴史仮名使いでカルタを取っている、信じられないですよ。そういうことが、カルタと融合したことによって、百人一首はですね、すごいパワーをもらった。カルタは、源氏カルタもあるし伊勢カルタもあるけど、結局百人一首が一番上手く融合して、逆に言えば他のカルタを淘汰してしまった。他のカルタは遊ばれてない。百人一首が一番カルタと上手く融合した。そういう歴史もある。遊びと勉強が結びつくなでね、百人一首以外にちょっと考えられない。「源氏物語の〇〇〇で遊びましょう」、なんてまず無理だと思います。そういう奇跡に近いことが行われて、奇跡に近いことが行われたからこそ百人一首が現在まで受継がれているし、これから先もたぶん受継がれるんだろうと、そういうふうなことを考えております。

で、変な事を申し上げますけども、「秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ わが衣手は 露にぬれつつ」という歌は、2番目の勅撰集である『後撰集』に入っております。ところがこの歌は、万葉集をいくら探しても出て参りません。この歌が本当に「天智天皇が詠まれた歌」かどうかは、むしろかなり疑わしいんです。だけでも、『後撰集』はこの歌を天智天皇の歌として勅撰集に載せる。逆に考えれば、先ほどから言っていますように、どうも平安朝も勅撰集も「天智天皇の御製の歌が欲しい、入れたい」多分そういう欲求というか要請というのがあって、「本当は違うかも知れないけれども天智天皇の歌としてこれを入れ、その後は天智天皇の歌として尊ばなければいけない」と、そういう「作為」と言ったらおかしいんですけども、感じてしまいます。「苫をあらみ」ってありますね、これ実は万葉集には出てこない表現なんです。そういうことを考えると、間違いなく「平安朝の和歌」と考えるほうが良さそうだ、ということなんです。もっというと、天智天皇を平安朝の始祖と言いましたけども、「もう面倒くさいから【平安朝の歌人】にしてしまえ」とそういう動きすら、私なんかは読み取りたくなる。何故かと言うと、カルタを見ればすぐ分かります、平安朝の装束を纏っています。持統天皇もそう、十二単を纏っています。つまり万葉の歌人ではなくて、平安朝の歌人として歌仙絵は描

かれている。つまり、平安朝の歌人として、親しまれている。態々「違います、天智天皇はもっと古い時代です」そういう余計なことはいらぬ、もっと平安朝に引き付けられた天皇として、天智や持統がいる。それは、人麻呂も赤人もそうです、「万葉歌人」じゃないんです、「平安歌人」なんです。そういう形でどうやら、百人一首は考えている。もっと言えば、百人一首は万葉集から歌はとらない。万葉集という大きな作品があっても万葉集から歌はとらない。勅撰集に載録されている歌をとる、ということ。そのことを、やっぱりもうちょっと大事に考えなければいけない、と思っております。

天智天皇の歌を、配布資料にも出しています。「わたつみの 豊旗雲に 入日さし 今夜の月夜 さやけかりこそ(万葉集)」これは学校の教科書にもときどき出てくる、ある意味で天智天皇の代表歌なんですけれども、この歌が勅撰集には載録されておられません。つまり、天智天皇が万葉集で本当に詠んだ歌を捨ててまで、天智天皇が詠んでいない歌を天智天皇の歌として、百人一首はとっている。そういう、つまり、作者の疑わしい・怪しい歌が、実は百人一首のなかには1割を超える。これをどう考えるかと、そういうことも問題になってくる。そうしますと、その人が本当に詠んだかどうかよりも例えば「その人らしい歌」が、その人の本当に良い歌かどうかよりも例えば「その人の人生を代表するような歌」が鍵になってくるのかも知れない。先ほど、紫式部（が撰ばれたこと）は怪しいと言いましたけども、「巡りあひて〜」という歌、何でこの歌がとられたかという、私なんか考えるには、最後に「雲がくれにし」とある。そして『源氏物語』のなかには「雲隠」という巻がかつて在った——光源氏が亡くなる巻です——。これは定家の時代には確かに在りました。つまり、紫式部が歌人として有名かどうかよりも、紫式部は源氏物語の作者として尊ばれるから、源氏物語を想起するような言葉をもった歌が撰ばれている、そう考えれば、非常に分かり易い。みたいなことを考えていきますと、必ずしも「秀歌撰」という意識で百人一首を考えることは、かえって間違ってしまう。秀歌撰という縛りを外れて、例えば「その人の人生に相應しい」「その人の生活に相應しい」「その歌がその人を表すような」そういうふうに分かれば、ピッタリするものが、結構ある。不思議なことに、で、重なりますけども、じゃあ何故「秋の田の〜」というのか、これ実は、仁徳天皇の「かまどの煙が見えませぬ」という話のようなね、ああいう天皇に相應しい民を思いやるころ、そういうものが、やっぱり考えられてくる。元々、純粋にですね「秋の田の〜」っていう歌を考えると、農民の農耕の辛さ・苦しさ・寒さ、そういうものを農民の立場から詠っている伝承歌であった可能性が高いんです。ところが、これがひとたび「天智天皇の御製」となりますと、まさにそういう農民の苦勞を思いやることの出来る為政者、立派な天皇、そういう天皇としての解釈が、この歌に新たに付与されてくる。つまり、先ほども仰ってましたけれども、歌の解釈は如何様にも出来る。視点を替えれば、作者を替えれば、立場を替えれば、如何様にも出来る。そうなりますと、この「秋の田の〜」は、天智天皇に相應しい解釈というのが求められてくる。そういう天智天皇に相應しい解釈、を補強するものとして、一つだけその配布資料に上げておきました。カルタをやっていると、似たような歌がありますよね、「わが衣手は露にぬれつつ（天智天皇）」と「わが衣手に雪は降りつつ（光孝天皇）」と似たような歌がある。定家の時代にカルタはありませんから、カルタで間違ふことを目標にして似たような歌を入れることは絶対にありません。むしろ、光孝天皇も天皇ですからね、下の句の類似が、「天皇の歌」として相應しいということを補強してくれる、みたいな側面もあるかも知れない。「露に濡れても」「雪に濡れても」そういう気持というのが、民を思いやる天皇の歌として相應しい詠いぶりなのかなあと、そういうものを感じさせる、ということなんです。

あんまり時間がありませんし、せっかく、配布資料に絵（カルタ）を載せておきましたので、ご覧下さい。このカルタを見て、一番特徴的なものは何でしょう。人物の、冠の後ろの「纓」が立ってますよね。これは「立纓」と言います。普通は垂れている。垂れているのと、巻いているのと、立っているのとあるんですけど、昭和天皇とか今上天皇の即位

式の写真を見たら分かります、立ってます。天皇だけは立纓。他の人は着けちゃいけない。ですから、この冠の纓が立ってればそれだけでこの人は天皇だと分かります。で、先ほど言いましたように、着ている着物は、600年代のもものではございません。900~1000年代、平安朝の衣装になっております。また、畳には色が付いているんです。これは「纏縹縁」という畳でございます、これも天皇・皇族は座れるけど普通の人は座れない、身分によって座る畳の縁まで違う、ということです。次のカルタ、これ面白いですよ。実はこれ、第二次世界大戦と関わりのあるカルタです——もう活字が使われていますね——。この歌仙絵の方はどなたか分かりますか？顔だけ見たら、聖徳太子ですよ。大戦当時、天智天皇は古い時代の人ですから、やっぱり「平安朝の衣装を着ていたらマズい」と言う人たちが出てきて、「元の時代に戻そう」と言ったときに、一番きれいな、格好良い人を探したら聖徳太子になっちゃった。知らん顔して聖徳太子を天智天皇の歌仙絵に使っちゃった、みたいなのがあって、こんな珍しいカルタが実際に在るんですよ。もう一つ、資料下のこのカルタ、歌仙絵が消えました。これ、何故か分かります？時代背景は、昭和16年です。太平洋戦争勃発。憲兵がやって来て、「天皇のお姿を遊ぶのは不届きだ。不敬罪だ」という時代。慌ててカルタ屋さんが、天皇8名の歌仙絵を全部水の中に入れてしまった。このカルタ、昭和16年にだけ発売されたカルタなんです。1年後には、百人一首は消えます。替わって、「愛国百人一首」ですね。で、終戦後には元に戻りますから、この水に隠れた天皇のカルタ、わずか1年間だけの珍しい絵になっております。実は、そういう珍しい絵がカルタとか百人一首の絵には沢山あるんですけども、なにせ美術的価値が無いもんですから、あるいは遊び道具ですから、誰もこれで研究しようという人が居なくて放置されている。私も、知らないまま何十年と過ごして、たまたま見つかるとか。だから本当はこういう安物のカルタでも何百個か集めて、その歌仙絵が見比べられれば、もっともっと色々なパターンだとか違いが出てくるかと思えます。

さてもう、あまり超過すると次の人たちが困りますんで、まとめに入りますけれども。私自身は百人一首を広めることを使命にしています。皆さん方、あるいは地域の方々には百人一首の良さを知ってほしい。やっとな津市が動いた、これはもう嬉しくてしょうがない。だから一回きりで終わらないで。今日は私すごいサービスで「大津は百人一首のふるさと」というキャッチフレーズまで作って持ってきたわけですからね。その大元には、まさに天智天皇、近江京、近江神宮という、百人一首のスタートがあります。配布資料の裏にはマンガ『ちはやふる』の作者・末次さんに描いてもらった私の似顔絵——これは宝物にしています——を載せていますけれども、どうも『ちはやふる』が人気で、近江神宮が「聖地」と言われるようになった。それはそれで良いんですけど、近江神宮が聖地というのが「カルタにとっての聖地」じゃなくて、やっぱり一つには宗教的な問題もあるけれども、どうせなら百人一首を考えた上で「百人一首の出発点」みたいな、カルタからもう一歩二歩三歩くらい日本文化のほうに深く入ってもらえると、もっともっと色々な面白さが見えてくるだろうと思えます。で、先ほども言いましたように、近江神宮だけじゃなくて石山寺も三井寺も、逢坂の関も伊吹山も、色々な百人一首にまつわる・関わるところが大津にはあります。大津はそういう意味では文化の宝庫です。そういう大津の、新しい観光の目玉みたいな形で「百人一首」というものが根ざせば良いと思います。京都と奈良と滋賀・大津と、そういう形で関西でタイアップして、百人一首を通して文化交流とか、あるいは世界に向けて日本の文化を発信するとか。そういうものにこの小さな百人一首がきつと使えるんじゃないか、きつと便利なものになるんじゃないか、というふうに私なんかは思っております、そういう宣伝も含めて、今日はやって参りました。今日は5人の方の講演がありますが、私としては「百人一首に色々な専門の方がどう切り込んでくるか」が非常に楽しみです。百人一首はそういう意味で、懐の深い、色々なものとフュージョン出来る、色々なものと接点がある、そういうものの一つだと思うんです。色々なところから切り込んで色々な形で百人一首と関わりを持ってくれれば、大津でも、考えも

しなかったような形で百人一首と切り結べる。そういうことをこれから先どんどんやって頂きたいと思って、私のお話を終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

■講演（講師：狩野博幸）

マイクは、カラオケのほうを持ち慣れておりますので、これでご了承下さい。（私は美術史家ということで）先ほどからもうここに来たことを後悔しております。「百人一首と近江」というテーマですが、私は軽々に引き受けてしまいまして、最初お話を聞いたときは「近世絵画と近江」というふうに思ったのがあって・・・、ですが「百人一首」ということで考えていかなければならない。いま吉海先生が「どういう切り込みを～」と言われましたが、斬る刀がございませんので、どうしたらいいもんかと考えております。まあ、私は結構、こう見えますも真面目な人間です——酒とタバコはやりますが——。で、どうしても「百人一首」ということがこのあいだからトラウマのようにずっと耳の中で響いております、必死で調べてみましたが、百人一首のなかで近江が「主題」で詠まれている歌というのは意外と無いわけですね。4～5首ということで、私が調べてみても、不思議なくらいに無い。じゃあ絵画の中からどういうものを選んできたらええのかなあ、ということが気になりましてですね、まあ、全く上手くいくことはないと思います。が・・・それと、またパネルディスカッションがありますので、話し漏れたことについてはそこでお話しをします。

百人一首の大元になる「和歌」ということから言えば、「歌枕」ということがあります。当然絵画にも歌枕は描かれるわけで、近江を描いた作品のなかにも沢山出てまいります、それを調べる間も無く「百人一首百人一首百人一首・・・」と悩んでおりました。本当に今日は、上手くいくかどうか全く分かりませんが。

私の担当分野で言いますと、去年は一年間「若冲」のことばかりで、全国十何ヶ所へお話しに行きましたけれども全部「若冲」ということでした。まあ、自分が一種の若冲ブームを作ったという現在を背負っておりますので、やりましたけど、「火付け役」と言われるのが一番嫌です。私は放火犯じゃないんだ、ということですが。まあともかく、今日は心を入れ替えてですね、近江の話をいたします。

近世絵画と近江

『近江名所図屏風（室町末期：16世紀後半）』、ここには近江・琵琶湖が描かれておりますが、これは滋賀県立近代美術館のお持ちのもので、六曲一双でそんなに背が高くない屏風です。異論はありますが、私はこれは狩野永徳の作品でいいと思っております。重要文化財になっておりますけれどもそんなに昔からあったものじゃなくて、近年発見されたものです。ご覧頂きますとお分かりのように、琵琶湖を東側から見た風景ですね。だから湖東は手前に山だけで表現されていて、ずうっと琵琶湖の北～西～南側が描かれています。向かって右隻のこの箇所、あれが「比良（＝歌枕）の山」ですね。それから下に松、一番下には水のなかに鳥居がありますが、これはご存知の通り白鬚神社ですね。で、この松がばあ～と並んでおりますけれど、これは流松というもの。それからカキツバタがずうっと描かれていますけれども、ここが「真野の入江」ということで歌枕になっております。これが百人一首に入っておれば良かったんですけど、入っておりません。まあ、こういうふうにしてどんどん描かれているわけですね。で、次の箇所は、堅田が描かれておまして、左のほうに人が見えますけれどこれが浮御堂でございます。いわゆる名所ですね、そういうものが描かれています。で、如何にこの絵描きがすごい絵描きかということは、こういうふうにアップにすれば一目瞭然でございます。それから向かって左隻のこの部分、日吉山王社が描かれております。小さな画面にこれだけのものが描けるとい

うのは、なかなか出来ないことをごさいます、私はこれが永徳の作だということで間違いないと思っています。それから次の箇所、ここには坂本の町がございまして、その上に小さな「山道」がずうっと描かれております。これで私は非常に助かったわけでありまして。「山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ 紅葉なりけり」と、これは春道列樹の歌ですが、古今集にこれがとりあげられたときに「滋賀の山越えにて詠める」ということがありますので、この山道がその山越え——いまで言う山中越え——ということでございまして。この歌は百人一首にございまして。それから、「唐崎（＝歌枕）の松」もこういうふうに描かれております。それから、箆張りの帆掛舟というものが描かれております。これは名所ということではございませぬが、琵琶湖独特のものでございまして、非常に場所柄がよく出ておりますね。平安時代にも当然こういう箆張りの帆掛舟はあったはずで。それから、三井寺の鐘もこういうふうに描かれておりますね。まあ、そういうことで、この近江名所図が描かれたのは1570年代くらい、永徳の若い頃、だいたいその辺りだと思われまして。

『日吉山王・祇園祭礼図屏風（サントリー美術館所蔵）』、これはつまり、琵琶湖と近江と京都（の祭り）を一双の屏風にしたものでございまして、これは、原本は室町時代のものだと思われまして。これにも唐崎の松、堅田なんか描かれております。唐崎の松の箇所をアップで見ますと、武士の集団が居まして、その中央に居るのが上杉謙信であると言われております。

『近江名所図屏風（サントリー美術館所蔵）』、いまの屏風よりちょっと後のものになりますが、やはり近江名所の屏風です。先ほど、冷泉さんから思い出として湖東の話が出ましたが、見てきました通り湖東のほうは絵としては描かれていなかった。描かれていないことで何かを喋るということは出来ませぬけれども、しかしこの屏風で並べていくと、この屏風では、左隻のほうでは少し湖東が描かれていまして、近江富士なんか出てまいります。その奥の雪景色についてはどうでしょうか、伊吹山が入ってきているのかも知れませぬ。この屏風は（琵琶湖を北西側から見た風景ですので）、先ほどのものと比べますと、琵琶湖の西側～東へ移っていくという非常に珍しいものです。そして右隻をよく見えますと、ここに膳所城がありますから、この辺りが大津ですね。膳所城の上をアップで見ますと、逢坂の関がございまして。坊さんが居て、単純な仏画も掛かっていて——銭が集まっておりますので、関税をしているんですが——、これが、次第に大津絵というものに成っていくわけですね。また、瀬田の唐橋の向こうに見えるのが、これが石山寺であろうと思われまして。同じく右隻の右のほうには、唐崎の松が出てまいりまして、その奥のほうには先ほど言いました「山越えの道」がここでも描かれております。また左隻のほうに戻りますが、ここに湖東が少し描かれていて瀬田の唐橋も描かれて、で、その下の箇所に実は「柳」が大きく描かれているんですね。非常に柳がばあっと揺れておりまして、春一番のようになっている。これは一体何が描かれているのかと言うと、ここには明らかに「近江八景」の意識が入り始めている、ということ。

近江八景自身は、いわゆる中国の瀟湘八景というものが昔からありまして、それに学んで近衛三藐院がつくったと言われております。少なくとも桃山の終わりぐらから江戸最初期にかけて作られていって、定着していった。だいたい「近江名所図から近江八景図絵」というふうの流れでいくのが、（近江を描いた）近世絵画の流れだと思っております。で、それで有名なものを挙げれば、『近江八景』で広重の作品がございまして。堅田落雁であるとか三井晩鐘、この辺りはもう話していくと時間が足りませぬから、またディスカッションのときにでも。それからこれは粟津晴嵐、先ほど柳がばあっと揺れているという屏風がありましたが、ですからあの屏風は、近江八景というものが成立して間近い頃の作品だということと言えます——広重のこの『近江八景』の場合は19世紀に入りますけれど——。それからこれは矢橋帰帆。そして瀬田夕照、唐橋の向こうに見えるのは近江富士のつもりでしょうが、近江富士といってもここまで高くはない。もしか

すると富士山かも知れませんが、要するに江戸人にとっての心の中に見える富士山、ですね。そして石山秋月。さらに唐崎夜雨。私はこの近江八景、というより日本の風景画のなかで一つを挙げよ、と言われましたら、これは版画ですけども、この唐崎夜雨を挙げたいと思います。雨、まさに夜雨をここまで表現した、そしてほとんど色を使わないで表現したものとして、私はこれが最高だと思っております。

それで、最後に一つだけ。まあ、「百人一首」がどうしても頭の中に離れずおまして……。北斎には『百人一首 姥がゑとき』という——富嶽三十六景を描いた直後ぐらいに作られた——作品があります。でも確か、百枚はありませんで、いま見つかっているもので29枚ぐらいだったと思いますが、その中の一つがこの絵で、春道列樹の「山川に～」という百人一首の歌が描かれているんですが、実はこの絵の左側の風景、材木を切っているこの風景というのは、直前に出した富嶽三十六景の『遠江山中』で使っている構図をそのまま入れ込んでいます。ですから、まあ、おそらく北斎はこの滋賀の山越えを通ったことはないんだろうと思いますが、しかしこの歌のなかで、そういう捉え方をしているのが分かります。

そういう感じで、無理やり百人一首でつなげましたが、もう少し僕は磊落に考えて「和歌と近江の風景」ということでやれば無限にあったわけで、誠に、荒々しい説明になりまして申し訳ありません。後ほどのパネルディスカッションでまあ、近江のことは議論させていただきます。ありがとうございました。

■講演（講師：渡辺麻里子）

皆様、こんにちは。ただいま紹介に預かりました、弘前大学の渡辺麻里子と申します。どうして私が現れたのか、皆さん不思議に思っただろうと思いますが、いま紹介して頂いたように、私の専門は日本文学から日本仏教文学ということで、お坊様の書かれたご本というのを専門に勉強しております。そして三井寺に保存されております貴重なご本についても調べさせて頂いたことがございまして、この度、園城寺の福家様のほうからお話を頂き、今日はこのような機会を頂きました。誠にありがとうございました。今日ここまでのお話でも、冷泉先生・吉海先生・狩野先生のほうから、もう満腹な、貴重なお話を聞かせて頂いて、私もいま聴講生のような気分しております。いまそこで一生懸命メモを取っておりました。それで、私はですね、今日この題「百人一首と近江～【おほけなく】【めぐり逢ひて】【これやこの】の和歌と説話～」を用意したんですけれども、「近江にまつわる和歌、百人一首」としたときに、説話文学の研究の立場からしますと、本当にたくさん話したいことがあるんですね。いっぱいのエピソードがある中で、それで20分と言われましたものですから、私、授業でも最後の1分まで授業をするので学生に嫌がられるんですけれども。これは今日の話にしようか、例えば今日の配布資料に載せていない話でも、篁の話とか……。先ほどですね、冷泉先生のほうからもまさに「歴史と文化が和歌なのである」と、全くその通りだと思います。吉海先生のほうからも「その人の人生が～」と、私も、詠み手の背景とか人生ですね、そういうものも全部含めて読んでいくのが古典文学の面白さだと思っております。それで、今日の私の役目は、先生方の隙間のお話をしまして、後のシンポジウムに繋げていくのが役目と心得ております。それではどうぞ宜しくお願いいたします。

はじめに

これ、先週うち（弘前大学）の学生達の写真を撮ってきたんですが、北東北地方というのは実は競技カルタが非常に盛んなんです。高校も、木造高校というのが強豪校なんですけれども。で、この「弘前大学かるた会ききょう組」、私は

これの顧問をしているんですが、私が着任したとき、理工学部の学生が「経験者なんだけれどもやる場所がない」と。サークルがなかったんですね、それで、顧問が居ると作れるからということで……。これ随分寂しい写真なんですけれども、実は期末試験中でして、みんな試験とレポートで勉強中なんですけれど、それでもカルタをやっていた学生達、ということになります。この学生達にとっても、今日私がここに居ることがですね、非常に「先生、がんばって」ということで、送られてきました。

さて、私は普段、古典文学を授業で教えているわけなんですけれども、この「古典」というのは学生にとっては遠くて、知らなくて、関係のないもの、というふうに思われることが多いんですが——授業を通して何をやるかとかそんなことではなくて——、日本の文化そのものであるし、物語である。「誰がどうしてどうなった」ということが、全然他人事ではなくて、その背景ですね、すべての人物や場所、人生そのものが面白いし「どうしてそこでそういうことを考えたのか、どうしてこういう行動をとったのか、一つ一つ知ることが重要だ」、「和歌も和歌としてあるのではなくて、その背景も全部含めて重要だ」ということを、授業では言っております。

で、今日はぎりぎり絞ってこの三首ですね。「おほけなく〜」「めぐり逢ひて〜」「これやこの〜」。時間の限り、私の立場からのお話をさせて頂ければと思っております。

慈円「おほけなく」の歌 ～比叡山と最澄と～

先ず一首目、慈円の「おほけなく 憂き世の民に おほふかな わが立つ所に すみ染めの袖」この歌から参りたいと思います。これ、すみませんが一応確認ということで、意味としては「恐れ多いことに、憂き世の民の上に墨染めの袖を覆いかけることだ。——私がこの比叡山に住み始めることになって——」というところでしょうか。先ほども、先生方の中からも「十人十色の読み方がある」というお話がありましたが、これは一例として出させて頂きました。それで、この歌は、慈円の師・覚快法親王が入滅したあと、彼は「慈円」という名前に改名したのですが——養和年間の頃——、20代後半頃の作ではないかとされています。比叡山延暦寺に住み、衆生救済を目指す、その使命感にあふれた気持を表した歌とされています。

慈円は、天台の僧です。そして父が忠通、兄が兼実、また園城寺の長吏三十二世覚忠大僧正が異母兄にあたります。建久6年（1195）「学僧の養成を行う」とありますが、これは慈円にとってはとても重要なところで、後の天台学僧たちが尊崇したお坊さん、ということにもなります。まあ、政治の色々なものに巻き込まれて、退任したりまた座主に成ったり、計4回座主に成った方ですね。そして和歌のほうでも「和歌所の寄人」として、また『新古今和歌集』には92首も採られる——西行に次いで二番目に多い——。それとまた歌集ですね、ご自身の歌集が4600首を収めています。いまやっている百人一首を考えますと、どんなに多いかわかりますね……。そしてこれがですね、「良い歌」ということだけではなくて、後世の学僧からは「釈教歌」つまり経文を説く、そういう和歌としても非常に重視されたものになります。で、この「わが立つ所」という言葉、これはいまでは比叡山延暦寺の異名というふうにされていますが、元々は「材木を切り出す山」の意味でした。この言葉は最澄の和歌によって有名になっていきます。

これがその最澄の和歌なんですけれども、不思議な字が並んでいます「阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ所に冥加あらせたまへ」最澄が比叡山を建立するときに、仏たちに永遠の加護を求めた歌、となっています。この聞き慣れない「阿耨多羅三藐三菩提」という言葉は、「無上正等覚」「無上正遍知」などと訳される、仏の真理を悟った境地を表す梵語（サンスクリット語）の音訳（漢字にあてていったもの）だということになります。そこで、漢語である仏教語を詠み込んで歌にした、初めての例ということになります。それがまた、「経文歌——経文を詠み込み、そしてその意味を

表す歌——」そういうジャンルの歌の前史としても注目されているものになります。で、この漢語について、例えば仏教語で言うと「鶴の林」という言葉がありますが「鶴林（カクリン）」と言うと和歌にはなかなか馴染まないわけですね。なので、和語としてひらいて「鶴の林」ということで和歌にフィットさせていくわけですが、こういう仏語そのものをですね、和歌にしている、それがまた名歌としてですね、この歌は非常に影響が大きくて、『和漢朗詠集』にも採られましたし、そのほか沢山の歌論書で引用されています。そして近代に至りましては正岡子規が、「いとめでたき歌にて候」と称するというようなこともあったわけです。

最澄は、実は十首ですね、歌が知られているんですけど、「あきらけく 後の仏の み世までも 光つたへよ 法のともし火」 こういう思いをですね、伝える歌として有名になっています。そして慈円の歌に戻りたいんですけども、この慈円の歌は、こういう最澄の思いを踏まえて、そして自らも天台僧として衆生救済への思いというものを重ねて詠んだ歌、このようにまとめさせて頂きたいと思います。

紫式部「めぐり逢ひて」の歌 ～石山寺と『源氏物語』～

ではちょっと急ぎ足ですみません、2番目の「めぐり逢ひて～」の歌に移ります。「めぐり逢ひて 見しやそれとも 分かぬ間に 雲隠れにし 夜半の月かな」という歌。「めぐり逢ひ」なんていう言葉も大変すてきな言葉ですが、これは『新古今和歌集』に採られている歌なんですけれども、詞書がありまして「早くよりわらは友だちに侍りける人の、年ごろ経てゆきあひたる、ほのかにて、七月十日のころ、月にきおひて帰り侍りければ」ということで、この幼友達がですね、早く去ってしまうこの慌しさを、月を友に見立てて惜しんだ歌だ、ということです。「久しぶりにめぐり逢って、あれは月かと思極めもつかない内に、早くも雲に隠れてしまった夜半の月よ——ちらっと見かけたと思う間もなく、急いで帰ってしまったあの方よ——」まあ、このような意味（通釈）を書かせて頂きました。で、今日この歌を採り上げたのは、この歌の内容というよりもこの人物・紫式部、今日のフォーラム自体が石山寺とのものだというふうにもお聞きしましたので。

ここからですね、『石山寺縁起』をちょっとご紹介していきたいと思うんです。紫式部は『源氏物語』の作者ということで著名な方ですけども、この源氏物語の執筆に関して、石山寺が深く関わっているとされているわけですね。で、紫式部は勅撰集に60首も入首するほど、非常に歌のほうの評価も高い方だと思います。それで、どのように石山寺、あるいは石山寺縁起と紫式部が関わるのか。紫式部は、物語を所望されて——何か作ってもらえないか、そういう依頼をされたときに——石山寺に参籠します。するとそこで石山親観の靈験を得て、源氏物語の着想を得た、これは非常によく知られているところになります。ちなみに弘前には、太宰治の生家がありまして、執筆した部屋など色々なところが残っているんですけども、以前そこにですね又吉さんも来て、三時間ぐらい座っていったという話があるんですけども、で、石山寺は「観音信仰」のメッカと言いますかね、昨年2016年にご開帳の年ということでしたが。実は弘前大学で勉強している学生達も、年に1回、私、引率して連れて来ます。色んなところの寺社を廻りまして、例えば五条の坂を上がって清水へとかですね、こういうのも、本を読んでいるだけではイメージが着かないので。皆さんにとっては当たり前かも知れませんが、京都を一度も見たことがないという人にとっては行ってみたいと分からないことが多いですね。まあ、それで連れて来ますが、この夏は石山寺も参りまして、みんな感激して「この年にいき合った」と学生達は「もう1回行きたい」と言っていました（3年後に）。「私も！」と言ったけど学生達は黙ってました。さて、この『石山寺縁起』なんですけれども、全七巻、三十三段あるものです。で、これら「寺社縁起」というのは、文学の研究者も非常に注目しておりまして、確かに靈験譚というのは「うちにお参りするとこんな良いことがあ

るよ」というですね、そんな宣伝めいたものもあるんですけども、私なんかにとりましては非常にですねこれは説話集としても面白いんですね。それで大学院のほうの授業でも、今年もこれをやっているんですけども。でも、現代の若者は仏さんの区別もつかないで、阿弥陀さんはどういうもの、お地蔵さんはどういうもの、そして観音様はどういうもの、から入っていくんですけども。観音様はですね、現世利益の仏様でもあって、何でも願いを叶えてくれる。それで、石山寺縁起にも色々なエピソードが残っていて、例えばですね、ちょっと顔の造作に自信のなかった若いお坊さんが、ここに祈願しまして、そして夢の中でですね、ブルンブルンと振られまして、すると出て行くときには大変な美男子になって帰っていったということです。そういうお願いも叶えてくれるのが、この石山寺になります。それで、紫式部が物語を所望されて、石山寺に参籠しましたときなんですが、まあいまはですね残念ながら、こういうお願いの仕方、駄目ですね「七日間本堂に泊まる」これは昔のスタイルになりますが。籠もりますと、そのときに、湖のほうが見渡されて心澄みて、様々な風情が心に浮かんだ、と。で、このときにとった紫式部の行動が大胆でして、「え！いま良いものが思いついた」となるのですが、いま寝ているところを起きて何も持っておりませんので、紙ですね、『大般若経』の料紙——「紙はないか」ということで、ちょうど仏様の脇に大般若経が見えたんですね——「ごめんない」と思いながら行って、ちょっと拝借をいたしまして、それに書いたわけです。勿論、それは申し訳ないと思っておりましたので、あとでもう一度、大般若経600巻を納め直した、ということです。先ほど教えて頂いたんですが、石山寺にはいまでもこの紫式部経が残っているんだそうです。これは石山寺の利生譚として語られた話ですけども、観音信仰の霊場ならではのお話というふうに、思います。

蝉丸「これやこの」の歌 ～蝉丸と逢坂の関～

「これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも あふ坂の関」この「逢坂の関」なんですけれども、『後撰和歌集』のほうには「相坂の関に庵室を作りて住み侍りけるに、行き交う人を見て」という詞書があります。「これがまさしく、行く人も帰る人もここで何度も別れ、知っている人も知らない人も、ここで何度も逢うという逢坂の関なのだなあ」という意味です。で、この蝉丸という人も、非常に謎の多い人。平安時代の歌人とされていますが、伝承としては様々で、ですがこの様々に変化していくところが、説話研究者の一番興味があるところなんです。 「和琴系」の話と、「琵琶系」の話というのがあります。 「僧正遍照に和琴を伝えた」というふうに伝える話と、「源博雅に琵琶の秘曲を伝えた」という説があるんです。僧正遍照は平安時代前期の僧（816～890）で、源博雅は平安時代中期の公卿（918～980）ですので、これを見て頂くだけでも、その出会っている人、これ両方というのはおかしいわけですよね。明らかに年代が違うんだけど、これがそれぞれですね、伝わっていくということなんです。 もう一つ蝉丸は、出自でも謎が多くてですね、式部卿の宮・敦実親王の雑色（世話役、身の回りの事をする人）という身分の低い者である、と。いうのと、醍醐天皇の第四皇子だという話まであって、こういう話が混在しているということになるんです。この蝉丸は、勿論皆さんご存知のように、今度は神様にもなっていきますし、非常に謎に満ちているということになります。

おわりに

最後、結びたいと思うんですけども、すみません駆け足で。今日は、ほんの2.1首ぐらいをご紹介したんですけども、このように、百人一首ひとつとっても、この近江の地との連関は様々に伺えるわけです。古典文学というのは決して遠いものではなくて、それぞれの歌や作者に様々な物語があって、それがまた古典文学の魅力であり、またそれを伝えていくのが日々の私の仕事だというふうに思っております。すみません拙い話ですが、以上で終わらせて頂きます。

ありがとうございました。

■講演（講師：佐藤久忠）

皆さんこんにちは。ご紹介頂きました宮司でございます。

福家様から、今日のことをお願いに、近江神宮のほうへ参られましたとき「私が司会やるから、安心してひとつ、参加するように」ということで、すっかり安心して来てみたら、なんとまあ、時雨殿の先生が総司会をやられるということで、吃驚しております。今日は、滋賀県では私一人、あと青森県から、あるいは京都の冷泉先生もいらっしゃってます。この、他所の方々のお話を頂いてですね、私はカルタの百人一首にはさっぱり知識が無いもんですから、感心して聞いておりました。「自分も喋るのを忘れておった」と、こういう具合であります。

ところで、私は宮司でありますから、この百人一首について、先生方のような学問的なお話は出来ませんが、立場上「天智天皇」ということであれば、やはり、引っ張り出されたかなあと、こういうふうになっております。ちなみに、私の生国は秋田でございます。だいがこの滋賀県とは違う土地柄で、まあ、なんとかの社長さんが「蝦夷地だなあ」と言われた所ですから、こちらのほうとはだいぶ違うということです。そういう立場からも、この御祭神・天智天皇様のことを、いつも思っておりますけれども、滋賀県というこの土地柄はですね、いつも申し上げておりますけれども、日本書紀に出てくるような古い古いお社・神社がたくさん在って、文化財もたくさんに在って——日本の中でも4番目に数えられるんですが——、そういう土地柄なんですね。近江神宮の社っていうのはしかし昭和15年の創建ですから、まだ80年に満たないわけです。だけれども、当時、昭和天皇さんにご聴許頂いて、ご創建頂いたもので、実はこれ以降は創建されたお社は無いわけですね——「勅祭社・元官幣大社」ということでは——。そういう意味では、最も新しいお社なんですね。そうすると、本当にこの古い土地柄・古い文化の地に、最も日本でも新しい神社が建て、それが両立しているという所が滋賀県なんだなあ、というふうになって、凄い所だなあと思います。

小倉百人一首一番札に天智天皇が撰定された理由

で、この話・・・もちろんカルタに関係あるんですよ？ 昭和天皇さんがですね、何故、この近江神宮をその時期にご聴許になって、皆さんの運動を聞き入れて、創建されたのか、ということなんですが。これは「日本の皇室」ということですよ。

日本の皇室がですね、まあ、天上が神様の高天原、葦原中国がわれわれのこの住むところです。そして——皆さんのお手元に、これだけのちっぽけな私のメモ（配布資料）があると思いますけれども。私はこれだけのことしか頭の中にあいませんから、カルタのことは生憎分かりませんがね——この、日本の皇室というのはですね、争いで勝ち取った人が王様に成るとか、そういうことではないんですね。日本の神話の中で、高天原に神様方があって、そしてそこでも神様方の生活があって、それでお田植えをなさって、稲をつくっておられるんですね。で、天孫降臨、三大神勅——瓊瓊杵尊がこの中国（ナカツクニ）に降られるときの詔勅——っていうのがあって、「豊葦原の千五百秋の瑞穂の国は、王たるべき地なり。就きて治らせ。行矣（サキクマセ）。」とあるわけですが、この「行矣」というのが大事なんです。「真幸く、幸く」つまり幸せに、行って、そして中国を治めてですね、そして平和にするように、と言っておられるわけです。で、その中で、三大詔勅の中の稲穂の神勅というのもありましてですね、それでこの、命の種である稲穂を授けられるわけですよ。で、稲穂を持ってですね、中国を治められる天皇さんも一緒に、お田植えをなさって・・・、

昨日は2月17日で伊勢神宮の祈年祭でしたけれどもね、おそらくご勅使さんが立って、そして最も重要な、新嘗祭とあわせて最も大事なお祭りが、昨日あったと思います。近江神宮でも遥拝式を致したところですけども。その田作りをなさるのは皆さんもご存知でしょうけれど——いまはテレビでもやられますからね——、昨日は、おそらく稲の種をお持ちになったのと違いますか。それは、聞くところによるとですね、刈り取ったものではなく、根付きのままお持ちになられたそうです。まあ、どういう意味かは分かりませんが、そういうふうな一つの昔からの伝統になっております。で、話を戻しますと、天皇さんがですね、今度は百姓にですね、その稲を、神様から頂いた命の種を渡して、育てて、自分たちの生活が幸せになるようにと栽培をさせるわけですよ。この「百姓」というのもね、「水呑百姓」とか「〇段百姓」なんて後で乱れてきますけどね、「百の姓」ということで「国民」という意味なんだそうです。国民に、種を、寄さし奉るわけですね。そして秋には、実り豊かな新嘗祭を迎えると。そこに、神様から頂いた種の、命の米ですから、当然神様に「こういうふうになりました」と報告の義務があるわけですよ。で、そこへ感謝を込めて、そしてお供えをしてですね、大きなお祭りをする。これはどんなお祭りよりもね、祈年祭（トシゴイノマツリ）の2月17日というのは——私のところのようにいまは3月17日にやるところも多いと思いますけれども——大きなお祭りなんですね。あと、新嘗祭もですけども。皇室でやられる新嘗祭はですね、今度は天皇さんが神様をお呼びになってね、神嘉殿でですね、ご一緒にご飯を召し上がる、そういうひとつの儀式があるわけですよ。これもまあ大変大きな意味になるわけですね。そういう日本の農業の、農本の、心がね、神様からずうっと国民に伝わっている、ひとつの、日本民族には根底があるわけですよ。ですから、この「秋の田の～」の天智天皇さんのお歌はですね、いわゆるお歌になる以前に、もうそういう地盤が、皆さんの心の中に定着しておられた。日本人の心の中に定着しておられた、というふうに思いますね。まあ、これはまったく私個人の考えですからね、こういう考えが、つまり三大神勅をもって説明をされたこの「秋の田の～」の天智天皇さんのお歌、そういう解説をされたものを私は読んだことはありません。ですが、私はずっと以前からこのように思っておりまして、今回まあ、吉海先生から言われて、これをちょっと出させて頂いたというわけです。

あとはですね・・・、「どうして一番目に？」ということでありまして、まあ天智天皇さんですからね、それは藤原家の大先祖・中臣鎌足公と関係があるということでもあります。日本の大改革をやって、日本の現代につながるこの大きな大きな土台を作られた、ひとつの「大化の改新」ということがあるわけですよ。大化の改新というのは僕ら、修身で習ったけども、まあその、入鹿の首がポーンと跳んでいるわけですね。で、血を噴いた首がですね、書物の上に載ってますよ。すごいな、と。震え上がるぐらいに、怖さを感じたものです。ですけども、やはりどうしてもですね、日本の国はこうあるべきだという、天智天皇さんの本当のこの思いが、将来を予ねたこの思いがあった。「ここで土台をきちんとしておかないと、日本の将来は…」という心配ですね、中臣鎌足公とその周囲の皆さんと密かな相談をして、そしてそういうひとつの、まあ革命という人もおりますけれども、そういうことを行われた。天智天皇さんは自ら（入鹿の）首を刎ねられるわけですから。で、天智天皇さんはですね、本当に凄い天皇だなあ、自分のそういう思いを賭けて、信念を、日本の将来を——個人的なことでは無いんですね——、純粋にこの日本の土台を思って行動された天皇さんであると。白村江の戦いもそうですね、向こうの、百済の救援を求められて、これを助けに行くわけですよ。で、そこで唐と新羅の連合軍に、世界の連合軍に敗れるわけですよ。当時はやはり、いまは「世界」といえば大きな規模になりますが、当時は「大陸」ですから、そういうことで、連合軍に敗れる。これもまあ「義を見てせざるは勇なきなり」みたいなことで、行ったと。そこでまあ、お母さんの斉明天皇さんが関わってくるわけですが（斉明天皇は660年から百済救援軍派遣の準備を進め、翌年には自身も筑紫に出陣し朝倉宮を本営とした。しかし、ここで病となり、7月に没した。）。

福岡の朝倉宮で、あそこで68歳ですかね、もう高齢ですよ、当時68歳といたら。延々とですねお輿に乗って、海を渡ってですね・・・、福岡まで行くまえに私だったら死んじゃいますよ。それから、そこでお母さんが亡くなったときに、天智天皇さんは、黒木宮（黒木御所）をつくってそこで喪に服される。で、喪に服されるときに歌がありますね「朝倉や木の丸殿に～」という歌でしたかね。それでこの喪に服すときに、名を名乗らせて通らせた、という説もあるようですが、それはどういうことかと言うと、天智天皇さんという方はですね、やはり長い間皇位というものにあまり執着心はない、しかし皇太子として、実質的なひとつの政治を執って、そしてお務めになるんですけれどもね。そこにも息の長いひとつの、天皇さんに成るまでの命があったということですよ、やはりそういう、名を名乗らせて通らせるような警戒心、注意力というのも散漫ではなかったと、霊感的なものも非常に持ち合わせた御祭神であつたらうということが伺えるわけですね。そういうことをね、ずっとその、歴史の中から、天智天皇さんを国民は見ておられる。で、この百人一首を、藤原定家さんが止むに止まれず編む、ということですね、やはりきちんとした物をですね、自分なりに考えて、将来に残しておかないと、ということをおぼえていたんじゃないかと。そうすると当然、そういう日本のことをずうっと考えて、野心もなく、純粋に、歩まれてきた天皇さんをですね、しかもご自分のご先祖と深い関わりを持ってこの日本を思っておる天皇さんを、秀歌とかそれ以前にですね、やはり第一番に据えられるということは、私は当然なことじゃないかと、こういうふうに思っているわけです。

で、ある学者が近江神宮へ来られたときの話ですけれども。歴代の天皇さんもね——先ほど煙の話が出ましたけれども——あえて、天皇さんを挙げられるならば、どの天皇さんを皆さんは挙げられますか、という問いに対してね、神武天皇さんですね、この天智天皇さんと、明治天皇さんと昭和天皇さん、このお四方を挙げられる方が圧倒的に多いと、こういうふうにその学者さんは言うておりました。で、これは何故だろう、ということなんですけれども。まあ国内的にも大変功績があつて、国を治めておられたわけで、——神武天皇さんはちょっと置いて——天智天皇さんと明治天皇さん、それから昭和天皇さんはですね、外国との繋がり、日本と外国との大きな関わりを持った天皇さんなんです。

とにかく、昭和天皇さんが、天智天皇さんに、どうかひとつこの世界を、日本を、平和で安全に治まるようにと願って創建したのが、この近江神宮ということなんです。戦に勝つ祈りもなさつたと思いますよ、兵隊さんもお参りしたからね。でも、軍国主義に加担した近江神宮ということじゃなくて、当然日本の国が勝つためにはですね、あの時代に、やはり勝ってもらわなきゃ困るわけですから、始まつた事に関してはですね。しかし、しかしですよ、昭和11年、そういう時代に向かっているときにですね、昭和天皇さんは「天地の 神にぞいのる 朝なぎの 海のごとくに 波たため世を」という御製を詠っておられるんですね。心を込めて詠われるわけです。それから、明治天皇さんもですね、明治37年の日露戦争の最中に「四方の海 みな同朋と 思う世に など波風の 立ちさわぐらん」という、平和であつて欲しいと思つているのにどうしてこういう波風が立つんだらう、という御製を、お詠みになつておられる。日本の皇室というのはね、民族、ただ日本民族のためだけの天皇さんじゃなくて、世界の、そういう平和を祈られてきた、凄いな日本の皇室なわけですよ。そこのところを世界の、知っている人はですね、日本ってなんとまあ皇室はすごいだろうと、世界で最も古い皇室、そしてこの平和をいつも願つて下さる日本の皇室ってのは素晴らしいと、いうふうに称えられるわけです。

短歌もちょっと出しましたからね。「百人一首」という言葉も、何回か喋りましたから、触れたこととなります。まだまだ喋り足りないんですけど。まあそういうことで、この滋賀県というところはね、大きなお役目の出来る所、動ける、そういう何かを持っている所です。難民救済をね、世界で一番最初にやつたところですよ、滋賀県は。これも天智天

皇さんですよ。そして、当時は文化水準が日本で一番高かったところも滋賀県だと、こういうふうに言われております。私もいま滋賀県民でありますけれども、秋田県から来た人間として、滋賀県の人にとってはやっぱりそういうことを忘れないで頂きたい。ここにいる皆さんはお分かりでしょうから、広めてもらいたいんですね。広めてもらいたい。まだまだ喋りたいことが沢山あるんですけれどね、まあ、時間が過ぎてもあれですから、残念ながら、また機会がありましたら。ありがとうございました。

*** < 10分間の休憩 > ***

■パネルディスカッション

吉海（進行役） 私だけ違うところに座らされていて、なんかちょっと、居心地が悪いんですけども。一部の講演を受けまして、二部ではパネルディスカッションという形でございます。ご承知のように、とにかく一人の持ち時間がすごく短かったものですから、枕で終わったというか、そういう形が多かったような気が致します。

冷泉先生に関しては、資料を見た瞬間に「これは一時間かかるな」と思うような形でした。ですから先ほども、「1ページもやってない」というお話でしたので、改めてまた、仰りたいことを言って頂ければと思います。

私のほうは、まあ一応、絞ったつもりですけども。配布資料の裏のほうにですね「近江八景・・・」と、これもまた変な色気がありまして、「百人一首を利用した新・近江八景」そういうバカなことを考えたり致しております。まあ、後ほどですね、狩野先生のところで改めてお話が出るかも知れません。

それから渡辺先生には、説話というか、歌人と色々なものが纏わりつくその面白さ、みたいなものを挙げて頂きましたけれども、一番たぶん面白そうな「蟬丸」が残ってしまったと。実はここに、面白い絵があります。その「蟬丸」なんですけれども、ちゃんと琵琶を持っております。蟬丸という人の説話も含めて、またお話し頂ければと思います。

で、佐藤さんには、やっぱり宮司としての立場があって、我々みたいなバカなことは言えないみたいなところがありまして、すごく真剣にというか、近江神宮の御祭神・天智天皇についてお話し頂きました。たぶん「カルタ」に関しまして、近江神宮が出来てかなり早い時期から、名人戦も含めて、カルタとの結びつきが出来た。つまり、近江神宮の歴史とほとんど、競技カルタの歴史が実は重なっている。逆に言えば、近江神宮がなければ、いまの競技カルタはまた違った形になってたかも知れないというくらい、非常に関わりが深い。先ほどから言ってますように、そういうことを含めて、天智天皇あるいは百人一首というものを見直す契機になれば良いかと、私なんかは思っております。

一応ですね、こういう形ですので、発表順に、補足とか言い足りなかったところを言って頂いて、それでまた改めて、討議する時間があればしていきたいと思っておりますので、すいませんが、冷泉先生から口火を切って頂ければと思います。

冷泉 先ほどはですね、本当に最初だけ、話をさせて頂いて終わってしまったんですけども。いつも、そんなことばっかりしております、用意したものを全て最後までお話するということはほとんど無いわけですけども。この、百人一首とまさに近江ということで言いますと、資料一枚目のところでも申し上げたと思っておりますけれども、「百人一首はまさに古典だ」と「日本の文学の古典だ」というふうに、考えて頂きたいということですね。日本文学の古典を象徴している、と。そして、その古典を遊戯にしたところ、江戸時代にカルタになったところがやっぱり大きい、ということを再確認して頂きたいということです。

で、私事になって恐縮なんですけれども、冷泉の家についての講演をさせて頂いたときに、ときどき「冷泉さんトコ

の歌はどんな歌ですか」と。「百人一首のような歌をずうっと詠み続けております」というふうに話したら、「それはどういうことなんですか」ということで、またそれを説明せなイカン、ということになってくるわけですが、それで、「ちょっとこれではイカン」と思って途中から方向転換して、「歴史と文学（あるいは文化）」ということで、奈良時代から鎌倉時代の始めまでほぼ600年間を代表する、歴史と、折々の我々日本人の心というものを表現しているんだ、という話にスッと摩り替えて、なんとか皆さん方にも迷惑掛からなかったんちゃうかな、ということであったかと思えますけれども、で、そのところ、（先ほどの講演では）近江神宮の祭神である天智天皇さんの歌までで、ほぼ終わってしもたん違うかなと思うわけです。資料二枚目のところに書いてましたですが、天智天皇さん、持統天皇さんが（百人一首の）1、2番で、最後の99番と100番が後鳥羽さんと順徳院さん。このですね、何故、最初と最後が天皇さんの歌になっているのか、これもやっぱり大きな問題ではないかと思えます。で、そうしたこと、またこれも人によって色んな説明があるのではないかと思うわけですが、百人一首の歌がお好きな方は、織田正吉さんの『絢爛たる暗号』というですね、面白い本がありまして、ここには色んな説が述べられているということも、申し上げたいと思えます。

それから、「歌枕」ですね。狩野さんが「歌枕を絵画化している」ということで、まったくその通りだろうと思えます。名所絵というのは、歌のところでも、大和絵でよく描かれるわけですが、そのところで今日は話をまとめておられたかなと。私がこんなことを言いますのは、私、専門は近世絵画なわけですが、ですから、「上手にまとめたな」と感心しているわけですが、で、そのところですね、歌枕ということ言えば、これも冷泉の家に関わることなんですけれども、「さざなみや 志賀の都は 荒れにしを 昔ながらの 山桜かな」というこの歌は、『千載集』の歌ですが、この歌はまさに「志賀の都」ということが詠われていて、桜の名所であったということが詠われているわけです。これを採られた人がですね、これも遠いところのご先祖さんの、俊成さんが撰集されたということですが、そのところですね「詠み人知らず」という・・・（※この歌は、作者が平忠度であることは周知の事実であったが、朝敵の身となったため、撰者の藤原俊成が配慮して名を隠した）、ここは本当は、冷泉の家の宣伝のためにもちゃんと言わなイカンかったことが、言えなく終わってしまったということですが、このところで、一番私は、やっぱり大事なのは「詠み人知らず」で千載集に採ったということです。何とも言えない、人間臭いというんでしょうか、洗練されたというんでしょうか、時の権力者に睨まれないように「詠み人知らず」というふうにして歌を採っているということですね。だから、そういうところが現代の日本人になくなってしもたんちゃうかなと。自分の思ったことをストレートに表現して、大きな声で言いさえすれば良いという・・・、皆さん方もそう思われませんか？ もっと分かり易く言えば、現代人には品が無いのではないかと。ですから、そうしたことを考えるということですね、このフォーラム、今日ここにお集まりの方々がそう思われたら、10人に伝えて頂いたら、大津市も皆さん文化人になられませ。そんなことで、他にも色んなこととお話したいんですけども、そんなことをまあ皆さん方に頑張って頂きたいと思えます。

吉海 ありがとうございます。百人一首を超えて、「文化人に成る方法」というところに行ったかと思えます。

で、あの、いまお話がありましたけれども、実は狩野先生には大変ご迷惑をおかけしまして、「なんとか百人一首と結びつけて下さい」という無理なお願いをさせて頂きました。そういうこともありますんで、改めて、本当は狩野先生の一番得意な分野から一番良い話を聞かせて頂ければ良かったんですけども、何かこう、付け加えることとか仰りたいことをちょっと、お願い致します。

狩野 初めて、人の前で怯えて喋るということ、やりました。大変ご迷惑を掛けました。それであの、私は、やっぱり百人一首にあんまり縛られなくて、まあ百人一首と関係は当然あるわけですが・・・、「比叡の向こう側」——こちら近江から見れば逆になりますけれども——やはりどこか、歴史の古さから言うと近江のほうが古くあるわけなので、京都の貴顕の人々が「近江」というものを非常にこう、何か心のより所に行っているようなところが絶対にあったと思うんです。滋賀の方は、京都に対してですね、何やら穏やかならぬ気持ちをお持ちだということをよくテレビで見たりしますが、そんなことは実は全くないんです。まあそういう、一種の共同幻想みたいなものが、当時の貴顕の間にはあったと。

それであの、少し私が、言わなかったことで、一番最初にお見せしました近江名所の屏風がございましたですね、白鬚辺りからだいたい三井寺辺りまで描かれている六曲一双の屏風。あれは私は、永徳でいい、永徳の若描だというふうに思っております。そうするとですね、永徳の、京都の『洛外名所遊楽図』屏風というのが実は、四曲一双で割と近年に出てまいりましてですね、それは永徳の若描で「だいたい二十歳ぐらいだろう」というふうに（自著に）書きまされたけれども、（近江名所図屏風も）だいたいそれと同じぐらいの古い物だと思っております。で、どうしてこういう絵が、六曲一双で、特に近江の西海岸がずうっと描かれているのかと色々考えていますと、やはり、永徳が後に23歳のときに、上杉本の『洛中洛外図』というのを描きますが、それを発注したのはまず間違いなく十三代将軍の義輝ですね。で、そうすると、それより前になるもので『洛外名所遊楽図』屏風も、おそらくこれは義輝の注文のものだろうと思えます。そう考えると、最初の『近江名所図』屏風も、この十三代・義輝との関係が非常に考えられる。というのは、非常に有名な話で、足利義輝というのは大変素晴らしい、武士としても素晴らしい方ですが、この方はやっぱり、室町末期の混乱状況にかなり左右されてですね、実は、都にずっといらっしやったわけじゃなくて転々とされるわけなんです。一番有名なのは、朽木においでになって、そこに言わば室町幕府が出来たようなことがございます。で、16歳の頃でしたか、ようやく京都に御帰りになって、その正月に「十三代将軍がようやく御帰りになった」ということで、色々みなさん挨拶に行かれるわけですね。その中に、——貴族も当然行くわけですが——足利家の御用を務めていた狩野元信という人がおりまして、この元信が孫を連れてそこの挨拶に来たと。で、そのとき、その孫は10歳でございます。将軍が16歳で、この孫——つまり狩野永徳——が10歳ということがあるんですが・・・。で、実はそれ以前にも、元信は朽木に居た義輝のところに行っているらしいわけですね。私は「そのときにも永徳と一緒に連れて行ったんじゃないか」と思うんです。その辺りから、この年齢の近い、将軍と御用を務める狩野家の御曹子がですね、非常に親しくなると。で、朽木の——ひなびた所ではありますけれども——野山と一緒に駆け巡ったかも知れない、ということ色々考えるわけです。実はいま永徳の新書を3年ほど、ほっぽって、全然書けないんですけども・・・、いま「あ、これ書いてやろう」と思っているんでお話をしているわけですが。だからこの、義輝にとっては、特に琵琶湖の西縁というのは非常に思い入れ深い所なんです。で、それが、今日一番最初にお見せしたこの『近江名所図』屏風に反映しているんじゃないか、ということ強く思いました。義輝という人は、武士としても優れた人でありましたが文化人としても非常に優れた人でございましたので、そういう、「和歌の世界における近江」というものを、この若い——おそらく二十歳ぐらいの——永徳に描かせたのが、この屏風ではなかろうかと。まあ、そういう気がだんだん、先ほどからしてまいりまして。この辺りもう少し、文献を固めて、お話が出来ればなど。それと、もう少し百人一首の勉強をして、説得力のある、「和歌の世界と狩野家の絵画」と結びつけて書ければなあということで。今日は本当にありがとうございました。

吉海 ありがとうございます。気を遣って頂きましてすみません。あの、絵というものは面白いものでね、歌枕もそう

ですけど、必ずしも写実ではない。しかも、居ながらにして見られる、そこに行かなくても絵は見られる。で、もっとすごいのは京都の人って——『洛中洛外図』もそうかも知れないけど——絵に描かれると、なにかそれを所有しているように見えてしまう。だから、近江の絵が描かれるっていうことは、近江をその、まあ、将軍が所有する、そういう「その気になる」みたいなところもあって、絵に描かれるっていうのは気をつけたほうがいいかも知れない。そんなこともあって、絵というのは「そこから何を読み取るか」、まさに和歌と同じような意味が含まれているということも、あるんだろうと思います。先ほどのお話（義輝と永徳の）を伺いますと、なんか、そのままテレビドラマになりそうな、脚本になりそうな予感がして、ちょっと楽しみにしております。

続きまして、渡辺さんのほうから、歌三首ですけれども、まあ、蟬丸を含めて何か補足する事をお願いします。

渡辺 先ほどですね、すみません時間の配分が悪くて、蟬丸の話がほとんどなくなりました。それで、これほとんど資料のほうに書きましたから、見て頂ければというふうに思うんですけども、この蟬丸の伝承がですね、先ほど「琴を教える」のと「琵琶を教える」のと二種類になるんですよ、ということだけ話させて頂いたんですが。それから、ここに詳しく本文を載せておきましたのは、『今昔物語集』という平安時代の終わりぐらいに纏められた説話集になります。その中では、源博雅に琵琶の秘曲——「流泉」と「啄木」という曲があるんですが——、これを教えた話、というふうになっているんですけども。ここに、かいつまんだものではなくて全文を載せてきたのには意味がありまして、この説話集の中で、要するに「どのように習ったか」——いま「狩野永徳がどのように、あの屏風を描くに至ったか」ということをですね、もういまここにその二人が居て、なんだか親しくなっていく様子を目の当たりにするようなお話、聞いていて本当にわくわくするわけですが——この経緯が、まるで「今昔物語集の場合はこういうふうに関き伝えている」というふうに一応実像として書くんですね。で、この中では「博雅という人は琵琶の名士」で、その次に載っている話では、王家に伝わっていた「玄象」という琵琶が鬼に盗まれてしまうんです、勿論これは大変な事態なんです。ある夜にですね、博雅は、宮中に居ながらにして「玄象」が鳴らされていることに気がつくんですね。「どこでこの音色は鳴っているんだ」と、ずっと一人で、こっそりとその音色を追いかけていくと・・・、どこだったと思いますか？ 九条のですね、羅城門の上で、鬼は弾いてたんですね。それで「それを返しなさい」と言って返してもらった。こういうエピソードを持った博雅が、今度はこの琵琶を習う、それが蟬丸に習うという話になっているんです。で、この蟬丸ですけれども、色々な伝承があるんですが『今昔〜』の中では「敦実親王の雑色」ということになっていて、そして「逢坂の関に庵を作って住んでいた」と。それで、そこで琵琶を弾いたりもするんですが・・・。先に「習った」と簡単に言ったんですけども、これ正確に言うと、(博雅は) 3年間こっそり通ってですね、聞き耳を立てて「弾かないか、弾かないか」と相当待ってたっていう話なんですね。そして、ある趣きのある晩に「今日こそは弾くのではないか」なんて思っていたら、中ですね「こういう情緒ある晩は、誰かと心ゆくまで語りたものだ」と言ったのを聞いて、「はい、私、博雅ここにおります」って、中に入って話している内に、弾いて聞かせてくれたっていう話になっています。

まあ、こういうほんの少しのエピソード、こういったものが様々に展開して、いま、蟬丸の神社が3つですか、色々ありますけれども、でもこれは「どれが正しい、どれが間違っている」ではなくてですね、これは実は、「人の思いが物語をつくっていく」ということがあります。例えば、北東北では義経は死んでないわけですね、平泉では死なずにずっと北へ逃げて行くんですけど、生きていて欲しいという思いが物語をつくる。こういう、解釈が変わることをですね、歴史家の方ではあまり好まない方もおられますが、説話の研究者からしますと、人の思いが物語をつくって、変容させていく・・・。小野小町なんてちょっと可哀想だと思います。百人一首のなかで詠んでいる「花の色は〜」の話は、自

分の容貌をもともと詠んだわけではなくて、こういうことがですね、あとになって「小町はなんだかすごく高飛車な人」みたいなものが伝書で出来ていく。あるいは、清少納言もですね、「すごく知識をひけらかした人だ」と紫式部に書かれてしまって、そちらがまたすごく伝播して行って、「なんて嫌な人。ああいう人には碌な人生が待ってないわ」ということで、「四国を遍歴する人」になってしまうんですね。まあこういうことが、でもこれが良い悪いではなくて、人がつくっていくもの。そして、この近江の地には様々なその、要素がありまして、まあ今日は「百人一首」でしたから話さなかったんですが、例えばすぐそこ、打出浜なんてありますね。あそこは義仲と兼平が会った、そして最後の合戦になる場面ですけれども——私はこの、「義仲最期」を授業でやるときにはもう、熱が入ります——で、初めて、車で走らせて打出浜を見たときに、吃驚した。交差点の信号に「打出浜」、私は『平家物語』で見ている打出浜ですよ。こういうことが、ここではクロスして在るんだなあっていうことが、非常に私にとっては貴重なことだといつも思っています。

吉海 ありがとうございます。蟬丸の話の中にも「博雅の三位（ハクガノサンミ）」博雅が出てきますけど、実は、陰陽師にも出てきますね。それから、あまり知られてないんですけど、天徳内裏歌合の中に、読師（講師？）っていう歌を読む係りで博雅って出てきてまして。結構博雅っていうのが、脇役として色んなところに顔を出す——しかも結構失敗譚が多い——みたいなところがありまして。「主役の周りに気をつけろ」っていうのも、あるかも知れません。

で、あの「蟬丸」っていう名前がですね、すごく分かりにくい。先ほど、坊主めくりの話が出ましたけれども、坊主めくりで一番注目されるのが蟬丸なんです。一つには「蟬丸は坊主か、坊主じゃないか」そういう、なんていうかな、ローカルルールで違ったりする。で、実は、任天堂の新しいカルタを見ると坊主に描かれている。カルタによって坊主に描かれたり、坊主じゃない隠遁者みたいに描かれたりしてまして、つまり、ルールの問題よりも使っているカルタの問題になる。皆さんはそういう、カルタの比較っていうのをしたことがないと思いますけれども、実はカルタによって絵が随分違って、その絵がルールにまで響いてくる。皆さんは「蟬丸」を坊主としてやったか、それとも役札・オールマイティとしてやったか、なんかそういう話題も、あってもいいかと思います。ちょっと百人一首そのものではありませんけれども、一人ひとり、そういう個性があるということです。

最後ですけれども、佐藤宮司には、天智天皇のことを話して頂きましたけれど、多分まだまだ話し足り無いことがおありかと思しますので、もう一言……。

佐藤 いや、沢山あるんですけど。あのう、累代の天皇さんの中ですね、歴史を通じてね、ずっと現実に、我々の世界に影響を及ぼしている天皇さんっていうのは、おられますかね。おられないと思うんですよ、天智天皇さん以外には。というのはですね、まあ、大津京遷都1350年ですけどね、何故ここへ大津京を遷されたかということについて、色々な説があると思うんです。要するに、白村江の戦いから危機を感じてですね、で、都を遷して、前は琵琶湖、後ろは山、そしてその要塞として非常に適した所である、というようなことでここへ都を遷したんだと。こういうふうにああ、これも（理由の一つとして）あるかも知れませんがね、私はそれよりも、天智天皇さんのひとつのこの考え方、見方をずっと見ておるとですね、そういう要素はちっちゃなことだと思うんですよ。まあ、水城だとかそういうものは福岡のほうへずっと築かれてね、ものすごい大きい物ですね、確かにそういうふうな防備もとる。それはもう攻められたら大変ですから。日本を守るためにですね、そういうふうな事もきちっとやられるんですけど、都をここへ遷したのはですね、「その日本の将来を、将来にかけての第一歩をどこから始めようか」「どこで基礎を築こうか」ということなんだと思うんですね。それがね、この大津京だったろうと。で、そのひとつの証拠としてね、——都は短

い短い期間でありながらですね——この「公地公民」なんていう制度。これはいわゆる私的な物を、田圃もみんな国のものにしちゃうわけでしょ。そんなの内乱が起きちゃってね、日本はもうてんやわんやになりますよ、普通ならば。例えば江戸時代なんてね、侍から廃刀令でね、もう内乱が沢山起きるでしょ。それと同じ。しかし、日本はあの程度で済んでいるということ、なんだけれども。まあ、そこで、「近江令はなかった」と言ったってですよ、そこで法律というのが、それから戸籍制度だとかね、国のひとつの税制問題、その辺がきちんとここで決められる。将来の目的を持ってきちんとここで決められるんですよ。それが、いまだに、憲法もまあ、あるわけでしょ。で、特にいまは、その、生前退位なんてことがありますけれど、まあ有識者会議がありますから、そちらのほうにお任せしますけれども。けれどもですよ、「不改革典——改められざる常の典——」というのが、どういうものであったのかは分かりませんが、累代の天皇さんはこれを宣命で宣らないとですね、ご即位ならないと、天皇さんになれないと、これがまあ書かれておいて、これがこの大津京でね、ここでもう決められるわけですよ。皇室典範の大事なところですね。皇室はこうあるべきということを、天皇さんの位置というものを、きちんと決められると。それは現在も、生きてるわけですよ、その制度が。で、おそらく学者の間ではね「明治天皇さんまで宣られたことは、確かなようだ」とこういうふうに言っておられる方がおられます。まあ、ところどころね、天皇さんがご即位のときにご報告があつてですね、そして奏上をしたということ。なかったであろうこともあるけれども、そういうふうに繋がれてきてですね——昭和天皇さんと今上さんと、このところは分かりませんが——、しかし内容についてはね、素晴らしいひとつのものがあって、これがまあきちんと……。まだまだありますけれどね、ありますけど。そういうこの、天皇さんのことをね、先ほども申し上げたような感じで、きちんと国民がそれを見ておられる、というひとつの、天皇さんの……。それから明治天皇さんがね、ご即位されるときには、大化の改新と神武天皇との世作りのことを参考にされたという——坂本太郎さんっていう学者がおりまして、その中に書いてありましたが——そういうことがありました。昭和天皇さんのときは間違いなく、天智天皇さんに倣つてですね、この……。『昭和天皇実録』の昭和21年8月14日のところに載ってるんじゃないですか。宗教臭いことは採り上げていませんけれども——近江神宮も出てませんが——、白村江の戦いがきちんと出て、そしてその中に当時の出席者の名前がきちんとあつて、それから当時の侍従日誌の中にもきちんと書かれて、そして「天智天皇さんのお執りになった、それによってですね、日本の復興を図りたい」と言つて、昭和天皇さんが、ここで戦後の復興を祈願されるわけですよ。ですから、滋賀県っていうのは不思議なことだと。

天智天皇さんは、当然やっぱりその、百人一首の第一に挙げなければいけない天皇さんなんですよ、と私は思っております。あとはまあ、霊感的とかね、そういうことは沢山あるんです。ですからそういう見通しをきちんとね……。ですからねこの、論理構成というのは大変だいじなんです。大事なんです。で、大事なんです、いつも私が学生さんなんかには言ってるのはですね「論理的なひとつの展開というのはね、つまり【見える】というのは、こうして私たちの顔の先しか見えないよ。顔から後ろのほうは、見えないんだから。目で見える範囲っていうのはこれだけのことや。しかし、後ろのほうはね、どんなにこの【潜在】というものは深いものか、ということね、我々は、潜在の中に生かされているということ、きちんと考えて、ものを発想しなきゃいけないよ」ということをね、いつも言ってるんですよ。ですから、この三井寺さんにいつも、——誉められてんだか貶されてんだか知りませんがね——「近江神宮の宮司はね、いつも神様と仏様のことを言ってくれるね」とか言つて、今日のカルタとね、関係がある……。関係あるんですよ。「短歌をやってますか？手を上げてください」と冷泉さんに言われて、私も短歌は多少……。國學院がなんとかだつて言われて、喜んでいいんだか、分かわないような発言でしたけれども。これもね、心のね、ひとつの表現ですか、こういうことをきちんとやっぱり訓練しておかないとね、「もののあはれ」とかね、そういうものを深く汲む、

ひとつの民族性という、「アジアの東に素晴らしい民族」という日本が称えられる原因の、それはこれから外れていく可能性だってある。

それからもう一つですね、この間テレビでね、受験生の特集をしまして、東大に入りたいというそのお嬢さんがですね、趣味はカルタをやっていると。この中でも見られた人いるんじゃないですか。で、私はね、競技かるただからね、人間競争心があるからね、当然あれはやっぱり、競技かるた、競技ってことは、それでやはりずっとこれからもいくでしょうし、盛んになってきたんだからと。競技でなかったらね、それは果たして、人間のそういうもの、競争心みたいなものがありますから、それでね、やっぱり浸かるだろうなあ。こういうふうに、思ってるから、競技かるた、まあ、ただ若いうちはやらせておけば、その内にね、能動的に、内容についてはね、理解してくるから、まず遊ばせておけやと。こういうふうにああ様としてね、「(親御さんは) いいことをやっているなあ」と、「ヤレヤレ、思いっきりなあ。頑張れや」と。ところがそのお嬢さんね、「得意な歌は？」って聞かれたら、「77番」とこうテレビで答えたんですよ。で、私、百人一首知らないからね、77番を開いて見た。そしたらね「岩をかく水がね、流れてきて、こう分かれて行って、でもまた最後に結ばれる」という歌ですね。「ああ、大した理解をされてるんだなあ、これなら東大間違いないな」とこういうふう思ったんですけどね。まあ、以上です。

吉海 冷泉先生もそうですけれども、百人一首そのものということよりも、百人一首に詠まれている五七五七七の歌言葉、それがやっぱり日本人の心との関わりで大きいだろうと。ただの会話じゃない、ただの文章じゃない、やっぱり五七五七七のなかに詠まれている歌言葉っていうのが非常に大きくて、それが頭の中で活性化していくというか、記憶していくことが、日本文化にたぶん繋がっていくんだらうと思います。そういうことを含めて、百人一首というのが、非常に便利なツールということだらうと思います。それから、佐藤宮司からはとにかく、もっともっと天智天皇を敬いなさい、天智天皇を見直しなさい、歴史的にもそうされるべき天皇ですよ、っていうのを訴えていらっしやるように思えます。百人一首の中でもですね、そういう目ではなかなか、天智天皇を見ないんで、改めてその、百人一首の一番に天智天皇が置かれているってことの意味は、これからもずっと考えていかなきゃいけないんだらうと思います。

えっと、一応、皆さんに補足して頂きましたけれども。本来ならば、もっと意見を言い合ったり、ここに来ているフロアの人から質問を受けたりとかするんですけども、そんな時間は到底なさそうなので。何か、もう一言でも言っておきたいということは、如何ですか、皆さん？

冷泉 いまですね、吉海先生のことからちょっと、一言だけ、申し添えておきたいと思うんですけども。我々日本人は「限りなく推し量る精神」というんでしょうか、心を持っているという、これは鴨長明が『無名抄』の中で言っているわけですけども。結局、鴨長明は「心ある人は、限りなく推し量るところがあるんだ」と。非常にストレートで論理的に話をする、ヨーロッパ的な考え方が、いまはですね、なされているかと思うんです——そうしたことも大事であるわけですけども——。そこで私が学生によく言うんですけども、「自由と平等っていうのは、非常に結構なことだけれども、それら二つは、併存するものなのか？ 自由であるとするならば、平等が存在するはずないと違うか。君らどう思う？」と質問するわけです。で、そうしたところは、まさにヨーロッパのものの方であって、論理というものはそのことであろうと思います(論理から導き出された【自由】【平等】という概念が、論理の下では併存することが出来ない)。でも我々日本人は、そうではなくして、多様なものを多様なものとして認めるというところが、あるだらうと思っております。それは、一神教と多神教の違いと言ってもいいのではないかと思うわけです。ですから、色

んなもの見方があるという。それをですね、皆さん方も、十人十色という言葉はご存知だろうと思います。でも、本当にそれを理解していらっしゃるでしょうか、ということをお聞きしたいわけでありまして。で、そういうことが本当に理解できるようになるのは、ある程度年齢をとらんと分らん、ということをお頃つくづく思っております。皆さん方、如何でしょう？

狩野 さっきから、(自分が)怒られているような気がして、「好い加減な生き方をするな」と言われているような。えっと、一つだけ、申し上げますと、あの、先ほど私はまあ、屏風をいくつかお見せして、最初の『近江名所図』屏風っていうのが、お気づきになったと思いますけど、比良の暮雪から始まって、あちらの隻のほうは紅葉がまた次のところにありますので「秋～冬」になっております。それから、坂本のまちから石山寺へかけての隻のほうは、梅と桜、そしてまあ水辺の景色ということで「春～夏」であると。四季の感覚っていうのは——まあ私が和歌の先生方にこういうことを言うと口はぼったいですが——四季の感覚っていうものを言うときに、よく絵画では「中国絵画の影響だ」ということを言いますが、そんな無茶苦茶なことはありません。何故かと言えば、一隻という屏風の中で、春～夏というのが、景色のなかで自然に移ろっていくわけです。同じ景色、同じ季節じゃありません。だからこの、春～夏～秋～冬が一つの画面の中で自然にこう交じり合って、しかもそれを不思議と思わないという、つまり先ほど冷泉さんが仰ったように、論理的なことではなくて、それはもう教えられないでも・・・、例えば中学生や高校生でもこういう日本の屏風を見たときには、それを自然のこととして受けとっている。そしてあの中国の絵画を勉強した雪舟さんでも、屏風を描いたときには四季山水図となって、季節がずうっと変わっていく。一つの画面の中で季節を変えていくというこの感覚は、どこにもないものなので、まさにこれが、私は和歌の世界であり、百人一首の世界であろうというふうに、今日またつくづく思いました。どうもありがとうございました。

吉海 そろそろ、時間は来たんですけども。あのう、本日は「文化遺産を活かした地域活性化事業」というなかで、初めての試みというか、「百人一首からみた近江」ということでこの会が行われました。伺っていてというか、私もそうですけど、まだまだ百人一首には色々隠れているものがあるし、近江には、古い歴史、まだまだ発掘して現代に活かしていかなくちゃいけないものが沢山あるような気が致します。今日を機会にですね、大津市あるいは滋賀県が、百人一首やあるいは近江の文化遺産を、もっともっと活用して頂ければ、非常にありがたいし、今日お集まりの皆さんもそういう使命を帯びて帰って頂ければ、この会にも成果があったかと思えます。

本日はどうもありがとうございました。